

一寸法師

動画リンク:

<https://youtu.be/9SDxnJ4Lk2E>

今回は、日本の昔ばなし「一寸法師」を学びながら日本語を勉強しましょう。

この動画は、1部・2部・3部に分かれ3段階のスピードで聴くことができます。

1部→2部→3部の順にスピードは速くなり、ふりがながあるのは1部のみです。

学習にお役立てください。

はじめに

お話を始める前に、昔ばなし・童話・おとぎ話の違いについて少し説明します。

■昔ばなし

「昔ばなし」には、昔から語り継がれてきた話という意味があります。

語り継がれてきた話なので、作者が誰かはわかりません。

■童話

子供が読むことを前提に作られた物語です。

作られた物語なので、当然作者は存在します。

■おとぎ話

子供に語って聞かせるための昔ばなしや童話のことです。

「おとぎ話」の中には、語り継がれてきた「昔ばなし」も創作である「童話」も含まれます。

「一寸法師」は とても有名な日本の童話です。

それでは「一寸法師」の お話を始めます。

むかし、摂津国の難波という所に、夫婦の者が住んでおりました。

子供が一人も無いものですから、住吉の明神さまに、おまいりをしては、

「どうぞ子供を一人おさずけ下さいまし。それは指ほどの小さな子でもよろしゅうございますから。」

と一生懸命にお願い申しました。

すると間もなく、お上さんは身ごもりました。

「わたしどもの願いがかなったのだ。」

と夫婦はよろこんで、子供の生まれる日を、今日か明日かと待ちかまえていました。

やがてお上さんは小さな男の赤ちゃんを産みました。

ところがそれがまた小さいといって、ほんとうに指ほどの大きさしかありませんでした。

「指ほどの大きさの子供でも、と申し上げたら、ほんとうに指だけの子供を明神さまが下さった。」

と夫婦は笑いながら、この子供をだいじにして育てました。

ところがこの子は、いつまでたってもやはり指だけより大きくはなりませんでした。

夫婦もあきらめて、その子に一寸法師と名前をつけました。

一寸法師は五歳になっても、やはり背がのびません。七歳になっても、同じことでした。

十歳を越しても、やはり一寸法師でした。

一寸法師が往来を歩いていると、近所の子供たちが集まってきて、

「やあ、ちびが歩いている。」

「ふみ殺されるなよ。」

「つまんでかみつぶしてやろうか。」

と口々にいって、からかいました。一寸法師はだまって、にこにこしていました。

一寸法師は十六歳になりました。

ある日一寸法師は、お父さんとお母さんの前へ出て、「どうかわたくしにお暇を下さい。」といいました。

お父さんはびっくりして、「なぜそんなことをいうのだ。」と聞きました。一寸法師はとくいらしい顔をして、

「これから京都へ上ろうと思えます。」といいました。

「京都へ上ってどうするつもりだ。」

「京都は天子さまのいらっしゃる日本一(にっぽにち)の都ですし、おもしろいことがたくさんあります。わたくしはそこへ行って、運だめしを試してみようと思います。」

そう聞くとお父さんはうなずいて、「よしよし、それなら行っておいで。」と許して下さいました。

一寸法師は大変よろこんで、さっそく旅の支度にかかりました。

まず、お母さんにぬい針を一本頂いて、麦むぎわらで柄とさやをこしらえて、刀にして腰にさしました。

それから新しいおわんのお舟に、新しいおはしのかいを添えて、住吉の浜から舟出をしました。お父さんとお母さんは浜辺まで見送りに立って下さいました。

「お父さん、お母さん、では行ってまいります。」と一寸法師が言って、舟をこぎ出しますと、お父さんとお母さんは、「どうか達者で、出世をしておくれ。」といいました。

「ええ、きっと出世をいたします。」と、一寸法師はこたえました。

おわんの舟は毎日少しずつ淀川を上って行きました。

しかし、舟が小さいので、少し風が強く吹いたり、雨が降って水かさが増したりすると、舟はたびたびひっくり返りそうになりました。そういう時には、しかたがないので、石垣の間や、橋ぐいの陰に舟を止めて休みました。

こんな風にして、一月(ひとつき)もかかって、やっとのことで、京都に近い鳥羽という所に着きました。鳥羽で舟から岸に上がると、もう、すぐそこは京都の町でした。

五条、四条、三条と、にぎやかな町がつづいて、ひっきりなしに馬や車が通って、おびたしい人が出ていました。

「なるほど京都は日本一の都だけあって、にぎやかなものだなあ。」と、一寸法師は往来の人の下駄の歯をよけて歩きながら、しきりに感心していました。

三条まで来ると、たくさんりっぱなお屋敷が立ち並んだ中に、いちばん目にたってりっぱな門構のお屋敷がありました。

一寸法師は、「なんでも出世をするには、まずだれかえらい人の家来になって、それからだんだんのし上あげなければならない。これこそいちばんえらい人のお屋敷に違いない。」

と思って、のこのご門の中に入っていました。広い砂利道をさんざん歩いて、大きな玄関の前に立ちました。なるほどここは三条の宰相殿とって、羽ぶりのいい大臣のお屋敷でした。

そのとき一寸法師は、ありったけの大きな声で、「ごめん下さい。」とどなりました。

でも聞きこえないとみえて、だれも出てくるものがないので、今度はいっそう大きな声を出して、「ごめん下さい。」とどなりました。

三度目に一寸法師が、「ごめん下さい。」とどなった時、ちょうどどこかへ出かけるつもりで、玄関までおいでになった宰相殿がその声を聞きつけて、出てごらんになりました。

しかだれも玄関には居ませんでした。

不思議に思ってそこらをお見回しになりますと、靴ぬぎにそろえてある足駄の陰に、豆粒のような男が一人、反り身になってつつ立っていました。

宰相殿はびっくりして、「お前か、今呼んだのは。」

「はい、わたくしでございます。」

「お前は何者だ。」

「難波からまいりました一寸法師でございます。」

「なるほど一寸法師に違いない。それでわたしの屋敷に来たのは何の用ようだ。」

「わたくしは出世がしたいと思って、京都へわざわざ上ってまいりました。どうぞ一生懸命働きますから、お屋敷でお使いなさせて下さいまし。」

一寸法師はこういって、ぴよこんとおじぎをしました。宰相殿は笑いながら「おもしろい小僧だ。よしよし使ってやろう。」とおっしゃって、そのままお屋敷に置ておやりになりました。

一寸法師は宰相殿のお屋敷に使われるようになってから、体こそ小さくても、まめまめしくよく働きました。

大変利口で、気が利いているものですから、みんなから、「一寸法師、一寸法師。」とって、かわいがられました。

このお屋敷に十三になるかわいらしいお姫さまがありました。

一寸法師はこのお姫さまが大好きでした。お姫さまも一寸法師が大そうお気に入り、どこへお出かけになるにも、「一寸法師や。一寸法師や。」とって、お供にお連れになりました。

だんだん仲がよくなるうち、何とって二人とも子供だものですから、いつかお友達のようになって、時々はけんかをしたり、いたずらをし合って、泣いたり笑ったりすることもありました。

ある時、またけんかをして、一寸法師が負けました。

くやしきで一寸法師は、そとお姫さまが昼寝をしておいでになるすきをうかがって、自分が殿さまから頂いたお菓子を残らず食べてしまって、残った粉をお姫ひめさまの眠っている口のはたになすりつけておきました。

そして、自分からはらっぱになったお菓子の袋を手にとって、お庭の真ん中に出て、わざと大きな声でおいおい泣いておりました。

その声を聞きつけて、殿さまが縁側へ出ていらっしゃって「一寸法師、どうした。どうした。」とお聞きになりました。

すると一寸法師は、さも悲しそうな声をして、「お姫さまがわたくしをぶって、殿さまから頂いたお菓子をすべて取って食べておしまいになりました。」といいました。

殿さまはびっくりして、お姫さまのお部屋へ行ってごらんになりますと、お姫さまは口のはたにいっぱいお菓子の粉をつけて、眠っておいでになりました。

殿さまは大そうお怒りになって、おかあさんと呼んで、「何だって、姫にあんな行儀の悪いまねをさせるのだ。」ときびしくお叱りになりました。

すると、このお母さんは、少し意地の悪い人だったものですから、お姫さまのために自分が叱られたのを大そう悔しがりました。

「いくら止めても、バカにしていうことをちっとも聞かないのです。」

そして、悔し紛れに、ありもしないことをいろいろとこしらえて、お姫さまが平生大臣のお娘に似合わず、行儀の悪いことを散々に並べて、

宰相殿は、なおのことお怒りになって、一寸法師にいつけて、お姫さまをお屋敷から追い出して、どこか遠い所へ捨てさせました。

一寸法師はとんだことをいい出して、お姫さまが追い出されるようになったので、すっかり気の毒になってしまいました。

そこで、どこまでもお姫さまのお供をして行くつもりで、まず難波のお父さんのうちへお連れしようと思っ、鳥羽から舟に乘りました。

するとまもなく、ひどいしけになって、舟はずんずん川を下って海の方へ流されました。

それから風に吹き流されて、とうとう三日三晩波の上で暮らして、四日目に一つの島に着きました。

その島には、今まで話に聞いたこともないようなふしぎな花や木がたくさんあって、一人の人が住んでいるのかいないのか、いっこうに人らしいものの姿は見えませんでした。

一寸法師はお姫さまを連れて島に上がって、きょろきょろしながら歩いて行きますと、いつどこから出てきたともなく、二匹の鬼がそこへひょっこり飛び出してきました。

そしていきなりお姫さまにとびかかって、ただ一口に食べようとしてました。お姫さまはびっくりして、気が遠くなってしまいました。

それを見ると、一寸法師は、例のぬい針ばりの刀をきらりと引き抜いて、ぴょこんと鬼の前へ飛んで出ました。そしてありったけの大きな声を振り立てて、

「これこれ、このお方を誰だと思ふ。三条の宰相殿の姫君だぞ。うっかり失礼なまねをすると、この一寸法師が承知しないぞ。」とどなりました。

二匹の鬼はこの声に驚いて、よく見ますと、足あしもとに豆っ粒のような小男が、いばり返って、突っ立っていました。鬼はからからと笑いました。

「何だ。こんな豆っ粒か。めんどくさい、のんでしまえ。」というが早いか、一匹の鬼は、一寸法師をつまみ上げて、ぱっくり一口にのんでしまいました。

一寸法師は刀を持ったまま、するすると鬼のおなかの中へすべり込こんでいきました。

入るとおなかの中をやたらにかけずり回りながら、ちくりちくりと刀でついて回りました。鬼は苦しがつて、「あつ、痛い。あつ、痛い。こりやたまらん。」と地びたをころげ回りました。

そして、苦しまぎれにかつと息をするはずみに、一寸法師はまたぴょこりと口から外へ飛び出しました。

そして刀かたなを振り上げて、また鬼に切ってかかりました。するともう一匹の鬼が、「生意気なまいきなちびだ。」といて、また一寸法師をつかまえて、あんぐりのんでしまいました。

のまれながら一寸法師は、今度はすばやく躍り上がって、のどの穴から鼻の穴へ抜けて、それから眼の後ろへはい上がって、散々鬼の目玉をつつつきました。

すると鬼は思わず、「痛い！」とさけんで、飛び上がったはずみに、一寸法師は、目の中からひよいと地びたに飛び下りました。

鬼は目玉だまが抜け出したかと思って、びっくりして、「大変。大変。」と、後をも見ずに逃げ出しました。

するともう一匹の鬼も、「こりゃかなわん。逃げろ、逃げろ。」と後を追って行きました。

「ははっ、弱虫め。」と、一寸法師は、逃にげて行く鬼の後ろ姿を気味よさそうにながめて、「やれやれ、とんだことでした。」といいながら、そこに倒れているお姫さまを抱き起こして、親切に介抱しました。

お姫さまがすっかり正気がついて、立ち上がろうとしますと、すそからころころと小さな槌がころげ落ちました。

「おや、ここにこんなものが。」と、お姫さまがそれを拾ってお見せになりました。

一寸法師は、その槌を手にとって、「これは鬼の忘れて行った打ち出の小槌です。これを振れば、何でもほしいと思うものが出てきます。ごらん下さい、今ここでわたしの背を打ち出してお目にかけますから。」こういって、一寸法師は、打ち出の小槌を振り上げて、

「一寸法師よ、大きくなれ。あたり前の背になれ。」といいながら、一度振りますと背が一尺のび、二度振りますと三尺じゃくのび、三度どめには六尺に近いりっぱな大男になりました。

「まあ、まあ。」お姫さまはそのたんびに目をまるくしておりました。

一寸法師は大きくなったので、もううれしくてうれしくて、立ったりしゃがんだり、後ろを振り向いたり、前を見たり、自分で自分の体をめずらしそうにながめていましたが、一通りながめてしまうと、急に三日三晩なんにも食べないで、おなかのへっていることを思い出しました。

そこでさっそく打ち出の小槌を振って、そこへ食べきれないほどのごちそうを振り出して、お姫さまと二人で仲よく食べました。

ごちそうを食べてしまうと、今度は金銀、さんご、るり、めのうと、いろいろの宝を打ち出しました。

そして一番おしまい、大きな舟を打ち出して、宝物ものを残らずそれに積み込んで、お姫さまと二人、また舟に乗って、まもなく日本の国へ帰って来ました。

日本昔ばなし「一寸法師」はいかがでしたか？

あなたの国の童話や昔ばなしをコメント欄から是非みんなに教えてください。

今後の動画制作に活かしますので、コメント欄から感想いただくと大変嬉しいです。



Japanese-listening-SUSHI

